

中北.com

地域教育情報紙

中北教育事務所

地域教育支援スタッフ

〒407-0024

韮崎市本町4-2-4

TEL 0551-23-3046

FAX 0551-23-3013

3

編集・発行 中北教育事務所 地域教育支援
担当：横森 一哲・雨宮 靖子

中北の地域社会 (community) の心の交流 (communication) をめざします

コミュニティ・スクール設置準備委員会始動！

山梨県立白根高等学校

山梨県立白根高等学校では、6月17日(水)、第1回学校評議員会兼コミュニティスクール設置準備委員会を開催しました。白根高校は、来年度からコミュニティ・スクールとなります。全国的にも数が少ない高校のコミュニティ・スクールですが、山梨県内では、今年度、初めての高校コミュニティ・スクールが身延高校でスタートしました。白根高校は、来年度から、吉田高校とともに県内第2弾のコミュニティ・スクールとなります。今年度の白根高校は、コミュニティ・スクール準備校です。

集まった学校評議員とコミュニティスクール設置準備委員の皆さんは、相沢校長先生の案内により、校内の施設見学と授業参観を行いました。校内には、ソーシャルディスタンスをとるための掲示物や手作りのパーティションなど、至る所に感染予防の工夫がありました。授業参観では、しっかりと落ち着いた3年生と3密を避けた体育館での1年生の元気な姿を見せていただきました。

会では、「学校評議員・CS設置準備委員会 設置要綱」、「学校指導重点目標・学校運営方針」、「白根高校の現状と課題」、「学校評価」のそれぞれについて、学校から丁寧に説明がありました。その後、学校評議員の皆さんから、学校の学習の開始が遅れたことからの不安や、部活動の活性化に向けた意見など、多くの意見が出されました。白根高校の生徒のことを心から心配し、白根高校のこれから大きく期待している学校評議員さん方の白根高校愛に感動しました。コミュニティスクール設置準備委員として、県教育委員会高校教育課の職員とともに、中北教育事務所の地域教育支援スタッフもこの会に参加させていただいています。準備委員会は、今年度中に今後も予定されています。しっかりと準備し、白根高校がコミュニティ・スクールとして飛躍するために、微力ながらお手伝いさせていただいています。

コミュニティ・スクールとは

学校運営協議会を導入した学校を、コミュニティ・スクールといいます。子供や学校の抱える課題の解決、未来を担う子供たちの豊かな成長のためには、社会総掛かりでの教育の実現が不可欠です。社会総掛かりで教育を実現する上で、これからの公立学校は「開かれた学校」から更に一步踏み出し、地域でどのような子供たちを育てるのか、何を実現していくのかという目標やビジョンを地域住民等と共有し、地域と一体となって子供たちを育てる「地域とともにある学校」へと転換していくことが重要です。コミュニティ・スクールは「地域とともにある学校づくり」に有効なツールです。

「コミュニティ・スクール2018」～地域とともにある学校づくりを目指して～ 文部科学省より



第1回学校評議員会

白根高校 公式ブログより

中北.com no.3 コンテンツ

- p1 白根高校
- p2 甲西中学校
- p3 里垣小学校, 山梨県生涯学習インストラクターの会
- p4 山梨県・Mt. Fuji イノベーションエンジン, Cafe de 寺子屋



生徒と先生の信頼関係が大切！ 南アルプス市立甲西中学校

どの学校も新型コロナウイルスへの対策を行いながら、生徒の日常を守っています。6月30日に南アルプス市立甲西中学校にお邪魔しました。この号が出る頃には、児童・生徒の学校生活状況がよりよくなっていることを祈っています。

登校してきた生徒は、健康観察用紙を担当の先生に見せるために、各学年ごとに用意された確認スペースに並び始めます。生徒は、ソーシャルディスタンスをしっかりとって並んでいます。家庭からの健康チェックを先生にみてもらい確認印を押してもらいます。もう一人の先生が、名簿にチェックを入れています。その後、校舎に入る前に、両手を出して先生に消毒液をかけてもらいます。学年ごと3～4人の先生、そして校長先生、教頭先生も生徒を迎えます。先生方は、マスクをしていない生徒を見かけるとすぐにマスクを着用するように声をかけたり、係の話や部活動の話など何気ない会話が積極的にコミュニケーションをとったりしていました。生徒と先生の明るいやりとりが印象的でした。校舎に入る前の健康チェックで何かあった場合のために、保健室前では保健室の先生が登校の様子を見守っていました。



朝の読書で一日を落ち着いて始めた生徒は、朝の会で体調管理の徹底について先生から指導を受けていました。甲西中学校では、部活動の朝練習の再開を7月15日とし、テスト期間を含めた7月14日までに生徒の体調管理への意識付けを徹底し、部活動の朝練習開始を心配なく迎えられるための準備や心構えへの取組を全校体制で進めていました。

甲西中学校の学校づくりの大きな柱でもある合唱が思うようにできない中、音楽の授業では「カップス」というリズム打ちを行っていました。音楽に合わせてリズムを打つことができるようになることをねらいとし、紙コップを机に打ちつけて音を出し、拍手と組み合わせてリズムを作る学習です。先生は、学習のまとめとして動画に記録しようと生徒に投げかけました。生徒は、「速くなりすぎないように曲をよく聴いて演奏したい。」、「キレのよい演奏にしたい。」などと一人一人目標を立てました。『うちで踊ろう』の曲に合わせて、生き生きと「カップス」を楽しみました。これまでの「カップス」の学習を振り返って「最初はできなかったけど、だんだんできるようになってきた。」、「やってみると、リズムに合わせるのが難しかった。」などの感想が出されました。先生は、「4拍子の曲なら合わせられるから、好きな曲で家でもやってみてください。」と、さらに生徒の興味・関心を高めていました。



1年生のクラスでは、生徒がクラスの気になるところについて話し合い、自分たちで解決してよりよいクラスを目指す活動をしていました。中学1年生と言えば、複数の小学校から友達が集まり、4月に時間をかけて学級づくりをしながら進むところですが、コロナウイルスの影響でなかなかできなかったことと思います。そんな中で、生徒は自分の学級を見返したときに、気になるところが出てきたのです。この学級では、教科の学習を進めることと同時に生徒の心に目を向け、生徒が自分の思いを表現し合う時間を重要視し生徒に預けたのです。学級や友達への思いを出し合う生徒の生き生きとした姿がとても印象的でした。



保健室では、気になる体調の生徒に対して、文部科学省・山梨県・南アルプス市の指針をもとに、県立中央病院の感染症の専門医の指導も加えながら、普段の生徒の様子も考え合わせて、保健室の先生は対応・判断をしていました。保健室の先生は、今見られる生徒の状況だけでなく、普段の様子、さらには家での様子や土曜日・日曜日の過ごし方まで知った上で生徒の本当の状態を判断していました。保健室の先生が普段の生徒の様子をどのくらいよく知っているのかがとても大切な要素であることを改めて感じました。



このように甲西中の生徒と先生の様子を見てくると、コロナ禍だからこそ、生徒と先生の信頼が大切なんだと気づきます。先生は、生活も学習も含めて生徒のことをとても大切にしている、生徒はそんな先生の気持ちがあつてこそ、こういう事態を乗り越えていけるし、こういう事態を乗り越えながら生徒と先生の信頼関係がさらに深くなっていると感じた甲西中学校の1日でした。



山梨県の特産品であるぶどう栽培が盛んな地域に立地する甲府市立里垣小学校では、20年前から校内にぶどう園を作り、専門家の指導を受けながら、子供達自身がぶどう作りにたずさわることによって、自分たちが育つ地域で生産されている果樹に対する興味や関心を高めるとともに、地域の自然環境や食について知識や理解を深める体験活動を行っています。7月3日（金）には、同小3年生がぶどうのかさかけに挑戦しました。指導して下さるのは、ワイン用ぶどうの栽培を専門に手がける農業法人「i-vines」代表を務めながら、20年間に渡って同小の子供達のぶどう作りを見守り続けてきた池川 仁さん。作業に先立ち、子供達は池川さんから、ぶどう房数を制限することによって色づきや味を良くするための摘房、風雨や鳥などからぶどうを保護するかさかけといったぶどう作りに欠かせない作業の目的や意義についての説明を受けました。池川さんの説明を聞いた子供達からは次々と手が挙がり、

「食べるぶどうとワインにするぶどうでは違いがありますか」「ぶどうによって収穫する時期は違うんですか」といった質問が出るなど、体験前の事前学習がしっかり行われている様子がうかがえました。説明を受けた後は、すべての子供達が友達と協力し、助け合いながらかさかけ作業を体験。地域の特色を生かした今回の体験活動を通じ、子供達が「なぜ？どうして？」と考えを深め、現実社会の課題の発見や解決のために必要な力を伸ばしていることが伝わってきました。



親子でプログラミングに挑戦 山梨県生涯学習インストラクターの会

社会のあらゆる場面に浸透し、私たちの生活をより安全に、また便利で快適にするために活用されているコンピュータ。今後はさらに幅広くICT分野で活用され、さまざま分野で未来の社会を支えていくことが期待されています。そのため、コンピュータを活用する力や、意図したことを実行するあるいは問題を解決するために必要な手順を考える力であるプログラミング的思考を身につけることは、変化の激しいこれからの社会を生きていく子供達には必要不可欠であると認識されており、今年度から小学校においてプログラミング教育が導入されました。そこで、子供達がプログラミングを体験し、その面白さを知るきっかけになればと、山梨県生涯学習インストラクターの会が山梨県社会教育振興会の体験交流事業の一環として主催する「夏休み親子ロボットプログラミング体験講座」が8月8日（土）、甲府市のライフロングアカデミーで行われました。



が8月8日（土）、甲府市のライフロングアカデミーで行われました。参加した親子はインストラクターの会 会長の望月和文さんの指導を受けながら、まずブロックでロボットを組み立て、次にそのロボットを動かすためのプログラムの作成に挑戦。プログラミングには、スクラッチというプログラミング言語が使われ、子供達が理解しやすく、取り組みやすいものになっていました。何度もプログラムを書き換えながら、試行錯誤ののちミッションを成功させた参加者親子からは、「達成感が得られた」「プログラミングの楽しさが分かった」といった感想が聞かれた体験講座となりました。

人工知能（AI）、ロボット、ビッグデータなどの先端技術を活用したイノベーションを通じ、少子高齢化による生産年齢人口の減少や地方からの人口流出、経済のグローバル化による国際的な競争の激化など、様々な課題の解決と持続的な経済の発展の両立を可能にする社会Society 5.0。このSociety 5.0の実現のためには、新しい価値を発見・創造し、社会課題を解決するためにさまざまな分野を結びつけるアントレプレナーシップ（起業家精神）を持った人材が必要だと言われています。一方、学校においても、現実の世界と自己との関わりの中から問いを見だし、自分で課題を立て、集めた情報を整理して表現する力を養う「総合的な探究の時間」が行われています。こうした状況のもと、探究を通じ、持続可能性を持たせるためにビジネスの手法で身近な課題の解決を図ろうとする意欲を持つ高校生を対象とした「高校生向け起業チャレンジプログラム Y-NEXT」が、山梨県教育委員会や山梨県内優良企業の協力のもと、



山梨県産業労働部の事業として開催され、35組の高校生が参加しました。参加した高校生たちはまずキックオフイベントにおいて、Mt.Fujiイノベーションエンジンの戸田達昭理事兼事務局長から、どんな課題を解決したいのか、ターゲットは、与えられる付加価値は、といった、社会課題を事業化するために必要な考え方やスキルを学びました。その後は先輩起業家や県職員、銀行員といった、すでに社会で仕事をしている方々からアドバイスを受けながら、それぞれビジネスプランを作成。予選通過チーム16組のうち11組が最終コンテストに進み、企業経営者など審査員の前で堂々とプレゼンテーションを行いました。最優秀賞に選ばれたのは昼寝時間を活用した新ビジネスを提案した山梨県立甲府第一高等学校の「おひるね普及委員会」。見つけた課題をビジネスへつなげるという、探究のその先を考える経験を通じ、高校生が主体的に広くまた深く学ぶ力をつけている様子が伝わってきました。

大学生が創る子供の学び場

Cafe de 寺子屋

子供達がこれまでに経験したことがない課題に立ち向かい、解決を図ろうとする意欲や能力を向上させるためには、地域でのさまざまな人との交流や体験が必要だと言われています。そんな中、大学生が無償で子供達の学習を支援する取り組みが甲府市内で始まっています。その名は「Cafe de 寺子屋」。営業終了後のカフェを会場に、小学生から高校生までの幅広い年代の子供達の学びを大学生が支援しています。Cafe de 寺子屋はその目指す学び場を、心地よく、共に歩む仲間と身近な指導者がいる場所と考えているといいます。そのため参加する子供達の年齢や校種に制限をかけることなく、いろいろな世代の子供達がそれぞれ自分のペースで学習に取り組む場所となっています。Cafe de 寺子屋における子供達の学びの基本は、疑問を持ったことに子供達自身が学びを繰り返す自学自習であり、将来教職の道を目指す大学生や学習支援ボランティアの経験を持つ大学生がメンターとして子供達の学習を見守り、必要に応じて支援をしたり、子供達の語る言葉に耳を傾けたりしています。多様な価値感を尊重する態度で子供達と接することで、子供達自身も社会にはさまざまな価値感が存在することを知り、他者を尊重する体験を手助けしたいと語る大学生たち。その傍らで学習に取り組む子供達からは、Cafe de 寺子屋が学校、家庭に次ぐ第3の居場所となっているとともに、異年齢の人とのふれあいを通じ、学力だけでなく、絆の育み方や社会への関わり方も学んでいる様子がうかがえました。

